

日本人の死生観

徐 翔 生*

はじめに

人間はどこから来たのか、死後どうなるのか。そして死ねばどこへ行くのか。死後の世界はまたどのようなありさまであるのか。これは東西古今を問わず、よく問われるテーマである。しかしこの問題について、はっきりした解答が出せる人はほとんどいないであろう。そして今日になってもその正解は誰にも分からないのである。中国では儒教や道教の現世主義の影響によって、古くから生を重んじ、死に無関心な態度を示している。ところが、この中国とは対照的に、日本ではかねてから死の問題に関心があり、死のあり方に深い興味を示した。日本人は死の問題を避けるどころか、時には死を高度に肯定し、また場合によっては死を美化することすらあったのである。それでは、いったいこのような日本人の死生観はどのような過程を経て生み出されてきたのだろうか。

本報告では、まず、日本人の死生観がどのような形態をとってきたかを古代から現代までの文芸作品を通して明らかにしよう。次に日本人の死生観がどのように変化したのかに論及し、日本人の死に対する独自の見方について議論したい。本報告は日本人の死生観の解明、及び多文化共生社会に向けた台湾における死生観の研究に少しでも貢献することができれば幸いである。

1. 古代日本人の死生観

今日、日本人は死ぬことを「仏になる」「往生する」「成仏する」といった言い方をすることがある。浄土教では、この世でいろいろな修行をすることで、死後浄土に往生することや成仏することが可能になると説かれている。人間が死ねば往生や成仏が可能になるのか、これは時代や宗教によってその考え方が違う。しかし死ぬことを「往生する」「成仏する」と表現することは、仏教から大きな影響を受けたことをうかがわせる。

この仏教は『日本書紀』によれば、欽明天皇13年の552年に百済から日本に伝来していたという¹。言うまでもなく、この点については異論もあり、『元興寺伽藍縁起』には仏教は538年に日本に伝わったと記されているが²、この説のほう信用度が高いとされている³。ただし、当然のことながら死という事実は人間の出現に伴ってすでに存在しているものである。それでは、仏教が日本に伝来する前に、古代日本人は死についていったいどのように考えていたのであろうか。以下、日本で最も古い書籍『古事記』を取り上げ、その中に表われている死の思想を考察しながら、伝統的な日本人の死生観を探ってみよう。

『古事記』の冒頭には、日本の創世神話が語られている。それは、天地開闢の後、伊邪那岐、伊邪那美が高天原から天降りして、日本の国土及び神々を生成する国生みの神話として知られる。その国生みの過程で、伊邪那美が火神を生んだ時に火の災を受けて隠れ、黄泉国へ行くことになり、

*台湾国立政治大学副教授

伊邪那岐が伊邪那美を慕って黄泉国へ迎えに行くが、黄泉国の穢れを見て逃げて再びこの世に戻るという物語が描かれている。ここからは、古代日本人が黄泉国を死んでから赴く世界、死者の国と捉えている。すでに土生田純之が指摘したように、『古事記』の中に描かれた黄泉国は、古墳時代の横穴式石室をモデルとしたものであるという⁴。では、古代日本人は死をいかに考えていたのだろうか。ここで国学者本居宣長の解釈を借りながら説明を試みたい。

本居宣長は人間が死ねば、再びこの世に帰って来ることができず、この世に死ぬことが最も悲しいことだと言っている。宣長によれば、死とは神のしわざであり、「凡て人の死るは、泉神の御作為」（『古事記伝』六之巻「神代四之巻」）⁵という。そして世の人は、「貴きも賤きも善も悪も、死ぬればみな此夜見国に往こと」（同書・同上）⁶であるとする。黄泉国は「甚きたなく悪き国」（『玉くしげ』）⁷であるが、人間が死ねば必ずそこへ行かなくてはならないことになっているから、「世の中に、死ぬるほどかなしき事はなきもの」（同書・同上）⁸というのである。宣長はこの死後のありさまが神代からの伝説であって疑いえない事実であるから、人間はこの事実を受けとめる以外にないことだと言ひ、「神道の此安心は、人は死候へば、善人も悪人もおしなべて、皆よみの国へ行事」（『答問録』十二）⁹と説いたのである。

これは本居宣長が神道の観点から見た古代日本人の死の捉え方である。以上述べてきたように、宣長の考えでは、古代人は死ねば黄泉国へ行くものと思つて悲しむ以外に仕方がないという。死ぬことは確かに悲しいことであり、古代日本人もこの悲しむべきことに悲しむが、逆にこの悲しみを皆に平等に与えられた運命として肯定したから、そこに安心も生ずるといふ考え方であった。古代人はその道理を理解したために、別に死に悩まされることもなく、死の不安から脱出しようと考えたこともしなかつた。そこで、古代日本人が死と

いう事実を受け入れ、平常心で死に臨むことができた、と本居宣長は言っている。これはすなわち「神道の安心」であるという。

2. 中世日本人の死生観

古代日本人は死後の世界を黄泉と捉えた。このような死後の世界観は『古事記』に限らず、『萬葉集』『懷風藻』などにも見えている。なお『日本霊異記』では、地獄のことを黄泉の国と称しており、黄泉より甦ることが書かれている。ところが、時代が古代から中世になってくると、仏教の影響が強くなり、日本人の抱く世界観に大きな転換があり、死後赴く世界が黄泉から地獄、さらに極楽浄土へと移し変えられていくようになる。ここでは中世を代表する文学作品『平家物語』からこのことを見てみよう。

『平家物語』はその名前から分かるように、平家一門の事跡を中心に書かれたものである。この作品は平家がいかに勃興し、全盛時代に入り、そしていかに栄華から没落し、やがて破滅に至ったか、その一部始終が記述されている。平家一門がこのような運命は、その巻頭の名文「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす」（巻第一「祇園精舎」）¹⁰に示されているように、「諸行無常」のことわりと位置づけられている。

『平家物語』の中でもっとも注目されるのは、死に直面した時、平家一門の人々が常に浄土への往生を目ざして、念仏して死んでいった、ということである。たとえば平清盛の次男宗盛は「西に向かひ、手をあわせ、高声に念仏し給ふ」（巻第十一「大臣殿被斬」）¹¹と、念仏しているところに斬られた。清盛の四男重衡は「只今の最後の念仏によって、九品託生をとぐべし」（巻第十一「重衡被斬」）¹²と、念仏しながら死についた。そして清盛の嫡孫維盛は「西に向ひ手を合せ、高声に念仏百返斗唱へつゝ」（巻第十「維盛入水」）¹³と、念仏を唱えな

がら海へ身を投げた。さらに清盛の娘建礼門院は「南無西方極楽世界、教主弥陀如来、かならず引摂し給へ」（灌頂巻「女院死去」）¹⁴と念仏しているうちに、この世を去ったのであった。このように、『平家物語』には念仏往生の事例が数多く見られる。特にこの作品の後半になると、平家一門の運命が衰えるにつれて、念仏往生がよりいっそう目立つようになっていくのである。

すでに石田瑞麿、渡辺貞麿によって指摘されたように、『平家物語』は仏教思想に密接な関連があり、特に浄土教から大きな影響を受けているという¹⁵。確かに先述した念仏往生はいずれも浄土信仰と深い関係があり、そのことだけを取ってみても浄土思想から強い影響を受けていたことがうかがえる。実は浄土は本当にあるかないか、念仏によって死後そこに往生できるかどうか、その見方は人や宗教によっても異なる。それにもかかわらず、『平家物語』からも察知できるように、中世の日本人にとって死後赴く世界は極楽浄土であり、それは無限の希望と夢に満ちた世界であった。人々はこのような世界を想定し、これに憧れを抱くことで、死の恐怖から逃れようとしたのである。このような死後の世界に憧れる思想は、『平家物語』の中にしばしば現われ、この物語における肝要となっている。この『平家物語』の例から、中世日本人の死生観が仏教に強い影響を受けていたことがうかがえる。

3. 近世日本人の死生観

近世の日本思想は二つの異なった思想の流れによって貫かれていると思う。一つは武士階級を中心にする武士道の思想であり、もう一つは庶民の自由な考え方である。この二つの思想が交錯し影響しあうことによって、近世の思想を構成している。このような意味で、近世日本人の死生観を考察するにあたって、武士と庶民の死に対する見方を見逃してはならない。いったい武士は死という

ことをどういうふうにつけてきたのか、また庶民は死についてどのような見方を持っていたのであろうか。以下、近世の代表的な武士道文献『葉隠』及び近松門左衛門の『曾根崎心中』を取り上げ、その中に見られる死の思想を検討しながら、近世日本人の死生観を論じてみよう。

『葉隠』はその冒頭の「武士道と云は、死ぬ事と見付たり」（『聞書一・二』）¹⁶の一節で知られる有名な著作である。この名文は『葉隠』の精神ともよく言われている。この本の著者山本常朝によれば、われわれ人間は誰でも死にたくないと思っている。しかし生命に執着するのは武士にとって、最も恥しいことであり、致命的なことである。この致命的なことを恥じる武士は「毎朝毎夕、改めては死々」（同書・同上）¹⁷と、毎日あらためて死のことを考えなければならない。そうすると、武士は主君のために死ぬのを躊躇わずに、家職を遂行することができるという。

山本常朝によれば、「先祖代々御厚恩の儀を不_レ浅事に奉_レ存、身心を擲ち、一向に奉_レ歎ばかり也」（『聞書一・三』）¹⁸という。このことから常朝が「恩」という倫理意識から主従関係を捉え、主君への献身を強調していることがうかがえる。「恩」の思想をさらに遡ってみると、仏教思想に大いに関連している。仏教ではさまざまな恩が語られ、特に国の恩・衆生の恩・父母の恩・三宝の恩などの四恩が強調されている。中村元によれば、仏教が伝来してから「恩」という言葉が世間で用いられるようになったという¹⁹。そして道端良秀・雲井昭善の解釈では、儒教ではさまざまな倫理道徳を説いているが、恩の倫理は存在しておらず、報恩の概念もあまり見られないとのことである²⁰。このように考えてみれば、『葉隠』も仏教から深く影響を受けていたことがうかがえよう。

仏教は近世武士の死生観のみならず、庶民の死生観にも大いに影響を及ぼした。『曾根崎心中』からも分かるように、心中という死の捉え方においても、仏教の影響が認められる。『曾根崎心中』

は近世大坂の醤油屋の手代徳兵衛と遊女お初の心中を語るものである。この作品においては、近松はお初に「会ふに会はれぬ其時は此世計の約束か」²¹と言わせ、徳兵衛とお初に「後の世もなをしも一つ蓮ぞや」²²と来世の逢瀬を願いながら、死に赴かせた。そして二人に「未来成仏疑ひなき恋の。手本となりにけり」²³と二人の死を肯定的に解釈し、心中という手段によってのみ二人のような恋が成就すると説いている。

すでに村松剛や石田瑞麿などが指摘したように、『曾根崎心中』をはじめ、すべての心中物は仏教思想に基づいて作られているという²⁴。「後の世もなをしも一つ蓮ぞや」という言葉にも示されているように、このような考え方の背後に、欣求浄土の思想、一蓮托生の考え方が潜んでいると言わなければならない。しかしすでに相良亨にも指摘したように、一蓮托生はもとより仏教本来の考え方ではなく、日本の浄土信仰から生まれたものであるという。日本では、その独自の浄土信仰に基づき、死後あの世で一つの蓮に生まれて、一緒になるという一蓮托生の思想が存在しており、この考え方が日本人の死生観に強い影響を与えたために、心中の思想が現われてきたとのことである²⁵。以上、二つの著名な作品の検討を通じて、近世の死生観においても、あの世を理想の国と説く仏教の強い影響が確認できた。

4. 近現代日本人の死生観

以上、古代から近世までの日本人の死生観を述べてみた。これまで述べたところからも分かるように、古代から近世までの日本人の死生観は神道、仏教の影響を受けてきた。特に仏教は中世から近世までの日本人の世界観に大きな役割を果たし、その死生観の形成及びそのあり方に、多大な影響を及ぼした。ところが、近代以後、日本が西洋の文化を摂取して国内の改革を進めるようになると、その西洋思想の影響によって、日本人の死

生観に仏教などの要素が見えなくなり、日本人は次第に死ということを肯定することができなくなる傾向が見られる。ここでは検討の素材として、1912年に明治天皇に殉死した乃木希典に対する、明治時代の代表的な文学者森鷗外と夏目漱石の見解を取り上げたい。

森鷗外は乃木が殉死してから5日足らずのうちに『興津弥五右衛門の遺書』を書き上げた。この作品において、鷗外は乃木に擬して脚色した興津弥五右衛門の殉死を語っている。そして主人公の細川忠興に「総て功利の念を以て物を視候はば、世の中に尊き物は無くなるべし」²⁶と言わせ、乃木の殉死に功利主義を越えた崇高な倫理があると述べようとする。それ以来、鷗外は創作において別の方向へ向い、それまでとは全く違う歴史小説を書くようになった。森鷗外の作品が一転したそのきっかけは、乃木の殉死にあったと言っても過言ではないであろう。一方、夏目漱石の『こころ』では、主人公の先生が明治天皇の崩御と乃木の殉死に触発されて自殺したことが書かれている。この作品において、漱石は先生に「明治の精神が天皇に始まって天皇に終わった」²⁷と思わせ、明治天皇の死去をきっかけに「明治の精神に殉死する」²⁸ことを考えさせた。そして乃木の殉死を知り、先生はついに「明治の精神」に殉死する決心をして自殺したのであった。以上のように、森鷗外と夏目漱石はともに乃木の殉死を衝撃をもって受け入れて、その死を高く評価している。

ところが、大正時代の文学者は乃木殉死に対する反応が変わる。たとえば志賀直哉はその日記に、乃木の殉死を「丁度下女かなにかゞ無考へに何かした時感ずる心持と同じやうな感じ方で感じられた」(「大正元年九月十四日」)²⁹と言い、その殉死を「一つのテンプレーションに負けた」(「同年・九月十五日」)³⁰ものと位置付けた。一方、武者小路實篤は「人類的・附乃木大将の殉死」において、乃木の殉死を「人類的な所がない」³¹行為とみなし、その殉死は理性に悖る行動であると批判を加

えた。そして芥川龍之介は『將軍』では、乃木が殉死する前に写真を撮ったことからその殉死動機に疑問を持ち、「まさか死後その写真が、何処の店頭にも飾られる事」³²と、その殉死が至誠から出たものなのかと疑っている。

現代日本文学の中で、乃木殉死に関する著作は、司馬遼太郎の『殉死』と加藤周一の『日本人の死生観』が代表的なものと言える。司馬遼太郎は『殉死』では、当時の時代背景と国家意識を分析しながら、乃木の殉死動機を論じている。司馬遼太郎によれば、乃木は明治天皇への殉死を遂げることによって、人々に天皇と国家への重視を喚起しようとしたという³³。一方、加藤周一は『日本人の死生観』において、心理学及び精神史的な立場から乃木の死生観の形成を叙述しながら、その殉死の動機を解明している。加藤周一によれば、乃木は殉死によって自分が理想化した武士としての剛勇を証明しようとしたという。そして殉死する瞬間、「乃木は自分の罪をあがない、かつ武士としての性格を実体化しようとした」³⁴と結論づけている。

以上述べたことからもうかがわれるように、乃木殉死に対する見方は、時代の変遷とともに変わっている。その殉死についての評価は、『興津弥五右衛門の遺書』及び『こころ』に見られる殉死への肯定、賞賛そして衝撃から、白樺派の作品と『將軍』に見られる殉死への批判、反発と冷笑へと変わるように見える。そして『殉死』、『日本人の死生観』になると、さらに合理主義、現実主義などの立場に基いて、その殉死の動機を解明しようとしている。このことから日本人の死生観そのものも変わりつつあることがうかがえる。つまり時代の進歩と価値観の変化により、日本人はもはや死を無条件に賞賛することができなくなり、死ということをより冷静かつ理性的な態度で捉えるようになったのではないかと思う。

おわりに

以上、日本人の死生観を歴史的に展望してきた。以上述べてきたように、日本人の死生観は時代や宗教によって異なっているが、また時代の進歩によって、その死生観に変化が現われつつあったこともうかがえる。本居宣長によれば、古代の日本社会では神道が存在しており、神道では人間が死ねば皆黄泉の国に行くという考えがあるから、この死に対する安心によって、古代日本人は死の悲しみを克服して、安心して死を受け入れることができたという。

ところで、仏教によって地獄と天国の思想が持ち込まれ、中世日本人の世界観が大きく変わった。特に浄土教の興隆に伴って、死後の世界は黄泉から浄土へと移り変わってから、それまでになかった死後の救済が現われてきた。この新しい世界観が受け入れられた後、人々は念仏することによって一切の罪が消されて、死を恐れずに死を迎えることができると信じられるようになった。浄土に往生するために、中世の日本人は死を恐れるどころか、さらに死に憧れ、自ら進んで死に赴く者も現われてくる。このような死に対する独自の見方は、『平家物語』から『葉隠』『曾根崎心中』まで明確に確認でき、さらに『興津弥五右衛門の遺書』、『こころ』の中にも潜んでいると言わなければならない。

近代に入ってから日本人は西洋文化の影響を受けて、西洋思想の観点から死を捉えるようになった。そして西洋思想の影響によって、日本人は死を高度に肯定することができなくなり、さらに死をどこか忌避するようになっていく。しかし日本の伝統的な考え方のうちに、死に安心があり、死に対する肯定、死を美化するという考え方はまた存在しており、なお日本人の死生観に影響を与えている。たとえば現代日本人は宗教心が希薄で、無宗教の人間であると言われても、日本という精神的土壌に生を受け育った日本人として、やはり古

くから日本文化に流れているこの死に対する独特な感情に影響されていると思う。そして日本人の心を動かしているこの感情は、さらに文芸作品などを通じて、今日でもなお日本人の死生観に影響を与えていると思われる。

中国人の視点からすれば、日本人はどれも死を好み、死を恐れぬ存在のように見える。日本人にとって死は必ずしも悲しいことでなく、場合によって死ぬことが楽になることという受けとめ方もあるように見える。したがって日本人は生命への執着が弱く、人の命を尊重すべきという哲学を持っていない、といったような疑いが出てくるかもしれない。確かに、日本人は一面に死に親しみがあり、死を美化するような傾向があるが、しかし一方では、死の問題が学問の世界で積極的に取り上げられていて、死生観への関心が深くなっている。たとえば日本では1990年代に入ってから人間の尊厳・安楽死・生命倫理に関する研究が行われてきた。今日では脳死や臓器移植などの生命観とのかかわりの問題が多くの人々の関心を捉えている。そして近年の学界では、哲学・倫理学・宗教学などのさまざまな分野から死生観の研究が進んでいる。しかし台湾では、この領域は研究が遅れており、今日でも生のことを重視して、死の問題を回避しようとしている。日本人の死に対する態度は、実のところ中国人の死生観に示唆を与えるべきものがある。また日本で行われている死生観の研究は、今後台湾における死生観の研究にも多大な影響を与えようと思う。そして日常生活において、常に死のことを考えて、死ということをして不可避な事実として素直に受け止めている日本人の死生観は、今日でも死に関する問題を日常生活に持ち込むことがタブー視されている中国人に、少なからぬ影響があると深く信じている。

註

1 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注 日本古典文学大系 68『日本書紀下』岩波書店、1965年、100頁。

- 2 櫻井徳太郎・萩原龍夫・宮田登校注 日本思想大系 20『寺社縁起』岩波書店、1975年、8頁。
- 3 吉田一彦「仏教の伝来と流通」『日本仏教の礎』俊成出版社、2010年、23-61頁を参照。
- 4 土生田純之『黄泉国の成立』学生社、1998年、319-320頁。
- 5 本居宣長『古事記伝』、『本居宣長全集』第九巻、筑摩書房、1968年、257頁。
- 6 本居宣長『古事記伝』註5書・239頁。
- 7 本居宣長『玉くしげ』、『本居宣長全集』第八巻、筑摩書房、1972年、315頁。
- 8 本居宣長『玉くしげ』註7書・316頁。
- 9 本居宣長『答問録』、『本居宣長全集』第一巻、筑摩書房、1968年、526頁。
- 10 梶原正昭・山下宏明校注 新日本古典文学大系 44『平家物語上』岩波書店、1991年、5頁。
- 11 新日本古典文学大系 45『平家物語下』岩波書店、1993年、330頁。
- 12 註11書・337頁。
- 13 註11書・241頁。
- 14 註11書・408頁。
- 15 石田瑞麿「往生要集の思想史的意義」（日本思想大系『源信』所収、岩波書店、1970年、482-483頁）、および渡辺貞麿『平家物語の思想』（法蔵館、1991年、134-135頁）を参照。このような解釈は福井康順「平家物語の仏教史的研究」（日本文学研究資料刊行会編『平家物語』所収、有精堂、1969年、222-226頁）、佐々木八郎『平家物語評講下』（明治書院、1963年、1238-1239頁）などにも見えている。
- 16 相良亨校注 日本思想大系 26『葉隠』岩波書店、1974年、220頁。
- 17 註16書・220頁。
- 18 註16書・220頁。
- 19 諸橋轍次・中村元『東洋の心』大修館書店、1988年、157-159頁を参照。
- 20 道端良秀「儒教倫理と恩」、雲井昭善「原始仏教における恩の思想」（『仏教思想4 恩』所収、平楽寺書店、1979年、69頁、133-134頁）を参照。
- 21 井口洋校注 新日本古典文学大系 91『曾根崎心中』岩波書店、1993年、112-113頁。
- 22 註21書・126頁。
- 23 註21書・130頁。
- 24 村松剛『死の日本文学史』（新潮社、1975年、228頁）、石田瑞麿『日本古典文学と仏教』（筑摩書房、1985年、374頁）を参照。
- 25 相良亨「日本人の死生観」『相良亨著作集4』ベリカン社、1994年、93-95頁を参照。
- 26 唐木順三編 明治文学全集 27『森鷗外集』筑摩書房、1983年、130頁。

- 27 夏目漱石『こころ』、『夏目漱石全集』第七卷、筑摩書房、1981年、144頁。
- 28 註27書・144頁。
- 29 志賀直哉「日記」『志賀直哉全集』第十二卷、岩波書店、1999年、212頁。
- 30 註29書・同上。
- 31 武者小路實篤「人類的・附乃木大将の殉死」『武者小路實篤全集』第一卷、小学館、1987年、494頁。
- 32 芥川龍之介『將軍』、『芥川龍之介全集』第八卷、岩波書店、1996年、186頁。
- 33 司馬遼太郎『殉死』文藝春秋、2009年、189頁を参照。
- 34 加藤周一『日本人の死生観上』岩波書店、1977年、80頁。